

ある犯罪者における利己主義の特徴

The Study of Egoism : In the Case of One Criminal

樋口 康彦
HIGUCHI Yasuhiko

はじめに

1981年に起きたパリ留学生人肉食事件は当時高校生であった筆者らの印象に強く残り、犯人のAが最初に著した本をいち早く買い求めた。

筆者らは事件が風化した後もAに関する全著作、映像作品などを手に入る限り取り寄せ、この不可解な事件に関して現在も研究を続けている。

凄惨な事件を生んだAの心理をなぞっているうちに、やがてAの利己主義に興味を持つようになった。利己主義とは自己の利益を重視し、他者の利益を軽視・無視する考え方のことであり、どんな人間でも多かれ少なかれ持っている特性である。

しかしAの利己主義は一般と比べて特異であり、そこにこそ事件の原因、本質が含まれているように思えたからである。

本論においてはAの持つ利己主義的思考の特徴を探ることで事件を引き起こした原因に迫っていきたい。

なお本論執筆にあたっては、1993年の作品「喰べられたい」を基に考察していくことにする。Aの全著作18冊のほとんどは事件について、あるいはA自身の妄想について書かれている。しかし、「喰べられたい」は、事件後考えたことについてのエッセイ、小説、インタビュー、詩、短歌、絵画が体系的に収められており彼の思想体系、とりわけ利己主義的な思考内容について詳しく知ることができるからである。

なお本論で用いるデータは全て本人の著書および映像、雑誌記事などに基づいている。

調査

Aについて

氏名：A(仮名)

略歴

1949年：兵庫県神戸市生まれ。体重1500グラムの未熟児として生まれる。

1972年：イツ人女性を襲い逮捕される。しかし親が多額の示談金を用意する。示談が成立し、不起訴処分になる。

1973年：和光大学人文学部卒業。

1976年：関西学院大学大学院修士課程修了。

1980年：フランスソルボンヌ大学大学院修士課程修了。専攻は英米文学および比較文学。

1981年：ソルボンヌ大学大学院博士課程在学中に、オランダ人留学生ルネ・ハンテヴェルトを自宅にてライフル銃で射殺する。死後、その肉を食す。

ショッキングな内容から世間の耳目を集めるとともに、国際問題となる。しかし、フランスにおける精神鑑定の結果、心神喪失状態にあったとして不起訴処分となる。

1983年：フランスの拘留所にて事件の顛末についてノートに記す。それは「霧の中」という題名で日本において発売され40万部を越すベストセラーとなる。日本に帰国し、東京都の松沢病院に入院する。

1985年：精神病が完治したとして松沢病院を退院する。その後作家に転身し、霧の中を含め2010年までに計18冊の著作(うち2冊は共著)を出版する。

身体的側面：元々未熟児だったということもあり体力のレベルは非常に低い。

乗っていたタクシーが急停車しただけで鞭打ち症になって通院したり、一日皿洗いのバイトをすると翌日は疲労から起き上がれなくなるほどである。

ちなみにVHSビデオ「Aの一週間」においては、100メートル走などの体力測定が行われている。しかし、全ての種目において同年齢の平均値に達していない。

知的側面：A自身、自分は理数系のことは非常に苦手であると何度も述べている。

彼の著作やインタビュー記事を読む限り、知的レベルは非常に高いと推察される。

対人関係：全著書を見渡しても、親の話ばかり出てきて友だち・友情に関する話はほとんど出てこない。そこで友人は少ないと考えられる。ただし、友人に迷惑をかけてはいけないという配慮からあえて記述していないだけかもしれない。なおAの著作には、お金が目当てでAと友人付き合いをしていた人がいたかのような記述が見受けられる。

また被害者である女性との間に実質的な人間関係があったかどうかは不明である。

それから少なくとも事件の時まで、恋愛関係を一度も経験していない。2011年現在においても同様の状態だと思われる。

家族：父は東京商大卒。大手総合商社勤務を経て、事件当時は東証一部上場企業の社長を務めていた。母は資産家令嬢。ひとつ年下の弟は有名私立大学卒業後、広告会社に社勤務していた。

考察

(エピソード1)

「彼女(被害者である女性)に痛みを与えることに、何も感じなかったのですか」という質問に答えて。

例えば刺し殺したような場合だと、力が直接相手におよび殺したという実感がありますが、カービン銃だと弾が飛んで行って殺した。つまり僕の力が強かろうが弱かろうが、それとは関係なく対象が倒れてしまうわけです。ですから自分の行為の結果が彼女の死であるという認識が希薄です。

(P 6)

他の著書においても自分が殺したという実感がないことを度々強調している。そこに自分と犯罪行為とを切り離そうとする意図が見てとれる。

(エピソード2)

「食べてから強迫観念が消えましたか」という質問に答えて。

はい、消えました。妄想と現実の隔たりをまざまざと見せつけられました。決して美しい、特別なものではなかったのです。それを知って食べる意欲はなくなっていました。あとは惰性です。ですからもう犯罪を犯すことはありません。

(P 8)

他の著書においても二度と自分が犯行を犯す心配がないということを強調している。もはや強迫観念という自分を犯罪に駆り立てたマグマが抜けきった安全な人間であるということを世間に示し、社会復帰したいという意図が見てとれる。

しかし、実際事件から30年間、同様の犯行を犯していないことを鑑みると本当に強迫観念が消え、健常者となったとも考えられる。

(エピソード3)

「今、日本でどうやって生計を立てているのですか」という質問に答えて。

—略— 僭越ながらも書きとして生きていきたいと思っています。あの事件から離れても書けるもの書きとして。

(P 10)

Aは事件をきっかけにしてマスコミで名前を売った。そして今度は事件と離れた話題でもやっ

ていけるような作家になりたいという希望を語っている。事件や被害者など、何でも踏み台にできるものは利用しようとするしたたかさが見てとれる。

(エピソード4)

父の会社の人が、日本からインスタント食品などを届けてくれた。僕はその時微熱があり、ひどく気分が悪かった。しかしその人の、パリを観光案内してほしいという頼みを無下に断ることはできなかった。一略—

「もし今撃てなかったら昨日無理をして人につき合ったためだ。そんなことのために、長年抱いていた『夢』を実現し損ねたら、悔やんでも悔やみきれない。とにかく撃たねば……」と突き上げるような声に苛まれた。

(P18)

ここでAは自分に銃の引き金を引くという最後の決断をさせたのは他人だと述べている。このことから、事件の責任の幾ばくかを他者に転嫁しようとする姿勢が見てとれる。

(エピソード5)

この溢れるばかりの父の愛の中で、しかし僕の中では何としても“収支決算”をせねばならぬ課題が残ってしまった。即ち先程の「罪と罰」の問題である。「何故に自分は未だ存在するのか」—この問いに答えない限り、僕は生きる屍に過ぎない。

社会奉仕、入信……様々な言葉が僕の前に現れ、そして消えていった。不幸にしていずれにも僕は入っていくことが出来なかった。そして残された唯一の道—それが表現であった。

(P22)

ただ単に「自分のやりたいことをこれからやって行きたいです」、ということなのだが、なぜか自分の罪を償うために表現活動をするということになっている。

(エピソード6)

本来なら、一回きりであったであろう僕の“マスメディアでの活動”は、しかし思わぬ方向に転回する。

しばらくして幼女連続殺人事件の容疑者・宮崎勉が逮捕された時、僕にはむろん、あらゆる取材を拒否し、やり過ごすこともできなかったわけではない。が、その時の自分には選択の余地はないように思われたのだ。僕がコメントをしようがしまいが、事件が引き合いにだされることは目に見えている。自分の「事件」の時と同じように、ここでも自分の意思や存在と無関係に自分が語られることは明らかだった。自分の知らないところで一方的に断罪されることに、僕はもううんざりしていたのだ。

(P24)

Aのその後のマスコミへの接し方から判断して、実は宮崎勤の事件をきっかけに自分がマスコ

ミに取り上げられたかったことは明らかである。内心ではチャンス到来と思ったことであろう。それにもかかわらず、マスコミの中で翻弄されたくないからやむを得ずマスコミに再登場せざるを得なかった、と語っている。

(エピソード7)

病名は、早発性痴呆症とかいうそうで、ま、精神分裂症のようなものでしょうが、今わの際に、「世の中、狂っとる」と叫んだというのですから、もしかしたら正気だったのかもしれませんが。

こんなものすごい先輩がいては、人を食った程度のAくんでは真っ青というところですが、ま、気力をふりしぼって書き続けましょう。

(P138)

Aはその著書の中でたびたび、凶悪犯や重度の精神障害者を引き合いに出し、「彼らのような人を理解できない」「彼らに比べれば自分など大したことがない」という主張を繰り返している。

そうすることで自分の相対的な異常性を低めようとしているのかもしれない。もし仮にそうだとすると、Aの犯した罪が消えるわけではない。

(エピソード8)

(宮崎勤に対して)何故、精神を新たにして、更生の機会を与えるべきだという一言が出ないのであろう。こういう報復のための刑罰意識が日本から姿を消さない限り、永山則夫という一個の秀れた文学者を、正義の名のもとにこの世から抹殺することもたやすいのだ。

(P171)

他の凶悪犯に更生の機会を与えないのはおかしいと、他者のために憤っているかのようであるが、実際には、自分に対し更生の機会を与えないのはおかしいと言っているのだらう。

なぜなら凶悪犯の全てに更生の機会を与えるということは翻って、Aにも更生の機会を与えるということにつながるからである。

(エピソード9)

「彼」は今、まさにその団塊の世代を中心とした世論に裁かれている。偏見と固定観念のもとに。彼のカニバリズムも然りだ。少なくとも僕は、「彼」が中野女史のような干からびた感性の晒しものにだけはならず、彼が新しい価値観を見出せる程に、情操豊かな女性の胸に抱かれて、再生することをひたすら祈っている。

(P173)

ここでも実は自分が救われたいという願望を声高に叫んでいる。最後の一文からもわかるように、Aは特に恋愛に対する憧れが強く、優しい女性と恋愛がしたいのだと思われる。

(エピソード10)

ヒンシュクを恐れずに言えば、じつはぼくの犯したカニバリズムのセクシュアリティなど、ホモセクシャルやSMや女装などと比べたら、カワイイものなのである。女性のおっぱいがほしいとって、幼児のようにラブホテルで妊婦にせがんでいるおじさんと、(殺したのはまずかったが)ちょっとあなたのお尻のお肉が欲しいとせがんだぼくとは、さほどの違いはない。

(P185)

ここでの主張はエピソード7とよく似ている。(殺人というプロセスが不可欠であるものの)カニバリズムを単なる性癖のひとつであるとして、自分の犯罪の異常性を相対的に低めようと意図しているものと考えられる。

(エピソード11)

その時の、自分の彼女に対する気持ちは、暗い日常生活の憂さ晴らしでもあったし、非人道的な傾向に陥っていたことは確かだ。こういう時、暴力も視野狭窄というフレームに封じ込められ、重大なことに思われなくなってしまう。これが怖い。

(P288)

この視野狭窄という言葉は、Aが自らの犯行を語る際、キーワードとなっている。一時的に理性が正しく働かない状態であったことを強調し、事件を起こしたのは本当の自分ではないと言いたいのかもしれない。ここでも犯罪と自分とを切り離そうとする巧妙な仕掛けが見てとれる。

まとめ

Aは恵まれた家庭に生まれ、親から過度の愛情を受けて育った。高度な教育を受けたインテリと言える。また生まれつき病弱であったこともあり、アウトドアよりインドアで様々な本を読んで過ごすことが多かったようだ。

Aはそういった環境で培った学術的な知識と文学的な素養を自己弁護のために使っている。弁護と言っても、法的な責任ではなく主に道義的な責任に対する弁護である。

Aは親からはかなり過保護に育てられ、そのことがAの持つ自己中心性につながったのかもしれない。そのことがどんな時も、自分は悪くない、自分がしたことは大したことではない、という思考を促すに至ったとも考えられる。

被害者を装い自分への憐れみを誘いつつ、巧妙に自分の考えを社会に認めさせようとするのがAの持つ利己主義の特徴だと思われる。

参考文献

佐川一政 1983 霧の中 話の特集

- 佐川一政 1990 生きていてすみません 北宋社
佐川一政 1990 サンテ 角川書店
佐川一政 1991 蜃気楼 河出書房新社
佐川一政 1991 カニバリズム幻想 北宋社
佐川一政 1993 食べられたい ミリオン出版
佐川一政 1994 華のパリ、愛のパリ IPC
佐川一政 1995 狂気にあらず 第三書館
佐川一政 コリン・ウィルソン 1996 饗カニバル 竹書房
佐川一政 1997 殺したい奴ら データハウス
佐川一政 1997 少年A ポケットブック
佐川一政 根本敬 1998 パリ人肉事件～ 無法松の一政 河出書房新社
佐川一政 2000 まんがサガワさん オークラ出版
佐川一政 2002 霧の中の真実 鹿砦社
佐川一政 2002 漫画サンテ マンダラケ
佐川一政 2002 復刻版霧の中 彩流社
佐川一政 2003 父が逝った。その時私は…… 創, 8, 112-121.
佐川一政 2006 業火 作品社
佐川一政 2008 極私的美女幻想 ごま書房
安田雅企 1983 パリ留学生人肉食事件 思想の科学社